

電算機使用によるプラトンの文体研究

長 瀬 真 理

今日、理工系の研究ばかりでなく人文系の研究に於いても、電算機が盛んに使用されるようになってきている。言語研究もその例外ではない。

文法の基礎となる屈折 (Inflexion)、派生 (Derivation)、統語論 (Syntax)¹⁾ はもとより語彙、語順、リズムといった文体²⁾の研究にも電算機が使われている。そこで今回は、ギリシア語の語順の問題を取りあげ、それを電算機を使って調べてみることにした。語の配置には、いくつかのパターンがみられ、それが作家の文体的個性を形成していると思われるからである。

直截に方法論の叙述に入る前に、ギリシア語の語順がどのようなものか説明しておく。

序

ギリシア語は、ラテン語と並んで、語順が非常に自由な言語である。一般に普通の文章では、(イ) 主語—述語又は動詞—客語、その他、(ロ) 客語—述語—又は動詞—主語、(ハ) 副詞的語句—述語又は動詞—主語、といった具合に、動詞又は述語が文の真中に位置することが多い。しかし、文頭、あるいは文尾に来ることも可能である。³⁾

例えば “Σωκράτης ἐγκωμιάζει τὸν Ἔρωτα.” (ソクラテスは、エロス神を讃美する。) という文を例にとってみよう。すると、

- (1) Σωκράτης τὸν Ἔρωτα ἐγκωμιάζει,
- (2) Σωκράτης ἐγκωμιάζει τὸν Ἔρωτα,
- (3) τὸν Ἔρωτα Σωκράτης ἐγκωμιάζει.
- (4) τὸν Ἔρωτα ἐγκωμιάζει Σωκράτης.
- (5) Ἐγκωμιάζει τὸν Ἔρωτα Σωκράτης.

(6) Ἐγκωμιάζει Σωκράτης τὸν Ἔρωτα.

以上六通りの単語連結が可能なのである。

又形容詞を例にとってみよう。

形容詞は、使用法としては、名詞の属性 (Attributum) となる場合と、be 動詞 (εἶναι) と共に述語形容詞として働く場合の二つに分けられる。どちらの役割として使われているかについては、一応、語順によって区別出来るようになっている。

先ず属性的に働いている場合を考えてみる。

(イ) ὁ καλὸς βίος

(ロ) ὁ βίος ὁ καλός

これは καλός (美しい) という形容詞が βίος (人生) という名詞を修飾するような場合のことを言い、意味は“美しい人生”ということになる。(イ)の場合は、修飾する καλός という形容詞が、βίος とそれにつく冠詞 ὁ の間にはさまっている、(ロ)の場合は、名詞の後に、名詞と同じ冠詞をつけた形容詞が並んでいる。

一方、述語形容詞の場合はどうだろう。この場合、意味は“人生は美しい”となり καλός は be 動詞の補語の働きをしている。

(ハ) ὁ βίος καλός.

実際には be 動詞は省略されることが多いので上記のようになる。では形容詞が文頭にきた場合はどうであろう。

(ニ) καλός ὁ βίος.

この場合は、“美しい人生”とも“人生は美しい”ともいずれにも解釈可能となる。

以上のように形容詞の語順だけを考えても、属詞として、あるいは述語形容詞として、前後を問わず様々な位置をとることがわかる。ところが実際には、上記の用例に留まらずもっと多様な配置が可能なのである。

(ホ) Ἀλλὰ δὴ πρὸς τρισὶ τέταρτόν τότε ἔφαμεν εἶναι γένος σκεπτέον.

(第三のものにつけ加えて、第四の種類を考察しなければならないと、

あの時我々は言った。)『Philebus』 26E

ここで τεταρτόν (第四の) という属詞は, γένος (種類) という語に付属しているのであるが, 両者の間には三語が入り述んでいる。多くの場合, 名詞とその属詞としての形容詞が続いてくることはまれで, 上記のように離れて配置されるのである。とすれば形容詞は, 関連する語の前後だけでなく, 文章中, いかなる場所に置かれても良いということになる。

さらに別の例を考えてみよう。一般に現代語では, 所有を示す属格は, その語が帰属するところの語や語句と連結して使われたり, アポストロフでつながられたりする。例えば, 英語で, “ソクラテスの妻” という場合,

(イ) the wife of Socrates.

(ロ) the Socrates' wife.

となる。ところが, ギリシア語では連結して置かれることはまれで, むしろ離れていることの方が多い。

例えば

Καὶ μέρος γ' αὐτὸν φήσομεν εἶναι τοῦ τρίτου 『Philebus』 27d

(それを第3の部分と呼ぼう)

τοῦ τρίτου (第3の) は μέρος (部分) に付属する属格であるが, 両語の間には四つの単語が並んでいる。

以上のごとく, 語や語句の位置は非常に自由である。これは名詞や形容詞等の例のみならず, 他のものにもあてはまる。副詞の位置も, 前置詞句の位置も, それを束縛する規則はない。一応慣習的なパターンはあるにしても, 語の配置は個人の選択の自由にまかされていると言える。そしてこの語順の自由さが, ギリシア語を多彩にし, 他方我々の解釈を困難なものにしている。だが, この語の配置の中に作家の個性が反映しているとも言える。どの語を文章のどこに, いかなる語との関係のもとに配置するか, ということがいくつかのパターンとなり文体を形づくっている。そこで, パターンを構成すると思われる語成分と, それに付属する語 (Attributum) を記号化してそれぞれの頻度と, 配置のパターンを調べてみることにした。

配置のパターンは、

- (1) 等置関係 (Coordinate Relation)
- (2) 分離 (Split)
- (3) 等置と分離の同時発生 (Coordinate & Split)

の三種類を考えてみた。

以下、次のような順序で具体的にその方法を説明することにしよう。

- (1) 使用されるテキストとその範囲について。
- (2) 記号化の方式と配置関係について。
- (3) 電算機による集計と処理。(紙面の都合上、注の後に入れられている)
- (4) 結果の分析。

説明の必要上、(2) の部分では、いくつかの実例を使ってパターンの説明が試みられている。

(1)

言語を電算機で処理する場合、先ず最初の作業は、入力用の資料を作る仕事である。その為には、使用されるテキストの部分を磁気テープから取り出されなければならない。今回は、プラトンの『ラケス』178 A1-201C2, 『テアイテトス』142A1-158E11, 『ピレボス』11A1-33E13, 及びクセノフォン『メモラビリラ』1.1.1-2.10.6.4, (Oxford Classical Texts 版) が使われた。プラトンの作品はすべて磁気テープに入っているが、特に上記の三作品が選ばれた理由は、それぞれの書かれた年代が、大体、初期、中期、後期に属することが、専門家の間で定着していることによる。又クセノフォンの『メモラビリラ』は最初に使われる予定はなかったが、丁度オックスフォードで、この作品の磁気テープが出来上った為、急遽つけ加えられた。この為、プラトンの年代別の文体比較と同時に、作家間の文体の比較という実験も試みられることとなった。

(2)

次に、文法の基本的な範疇である品詞（文成分）を記号化し、それを上記のテキストの各語に分り付ける（Tag）作業を行う。これは磁気テープから取り出された部分（実際は穴のあいた白いテープ状のもの）を、IBM タイプライターと連結している、ギリシア語変換装置を通してプリントアウトされたものを台紙として使用する。

品 詞		付 属 語	
主 語	0	主語の付属語	5
動 詞	1	動詞の付属語	6
直接目的語	2	直接目的語の付属語	7
間接目的語	3	間接目的語の付属語	8
述 語	4	述語の付属語	9
副 詞	62		
前置詞	63		

この分類表は、通常のギリシア語の文法書に示される品詞分類とは大分異なっている。

先ず一般的なギリシア語の分類に目を通しておく。

ギリシア語は、非常に語形変化の多い、典型的な屈折語であるから、形態的に語尾変化を通して、品詞を区別することが出来る。主要なものとしては、名詞、形容詞、代名詞、数詞、動詞が挙げられる。又語尾変化のないものとして、前置詞、接続詞、副詞、不変化詞がある。又これらの品詞の内、名詞、形容詞、代名詞には、性（男性、女性、中性）数（単数、双数、複数）、格（主格、属格、与格、対格、呼格）、さらに、人称（一人称、二人称、三人称、各単数、複数形）が下位区分される。

ここで、上記の分類と、先に示した分類表を比較して両者の相違点を明らかにしてみる。

- (1) 全体的に先の表では、「主語」「直接目的語」等といったような、機能的 (Functional) 分類と 副詞, 前置詞といった範疇的 (Categorical) 分類と⁴⁾が混在している。
- (2) 形容詞, 名詞, 接続詞, 不変化詞がない。
- (3) 主語, 直接目的語, 間接目的語は, 現代語同様 (例えば独語, 仏語等) 主格, 対格, 与格に対応するが, ギリシア語では, 既に見た通り, 他に属格や呼格があり, これらが省略されている。
- (4) 主語, 動詞, 直接目的語, 間接目的語, 述語にはそれぞれ付属語 (Attribution) という項目が加えられている。

次に, 何故このような 12 ケの記号体系になっているかを, 以下具体的に例を混じえて説明しよう。その際, どのような配置が, パターンとして考えられているかも明らかにする。

主語 (0) とその付属語⁵⁾ (Attributum) (5) から始めよう。序論でも触れたが, ギリシア語では, 主語になるものは名詞に限らない。形容詞も冠詞をつけるだけで実体化され, 主語となりうるし⁶⁾, その他, 動詞の不定詞, 分詞, 代名詞, あるいは語群など, ほとんどあらゆる語が主語 (Subject) となりえる。だが, ここでは様々な品詞が主語として振るまうこと自体は問題とされない。主語及びその付属語が, それぞれの文章において, 主語群をつくる際に, その主語同志, あるいは, 主語の付属語同志が, どのような関係で配置されているが問題となる。具体的には, 果して, 等置関係 (Coordinate) として配置されているか, 分離 (Split) として配置されているかを調べるのが重要なのである。〈付属語と名詞の関係 (Hyperbaton) ではないことに注意〉実際に等置関係と分離がそれぞれどのようなものか, 例で示すことにしよう。ここで等置関係にある単語同志の間には^{プラス} $+$ のサインが, それぞれの記号 (数字) の前につけられている。分離の場合は^{マイナス} $-$ のサインが, 関係する語の中でも先にくる語の場合は, その語の記号の後に, 後にくる語の場合は, その語の記号の前につくようになっている。

(イ)	ἀγαθός	ἀνὴρ	καὶ	καλή	γυνή
	5	+0		5	+0
	付属語	主 語		付属語	主 語
	(善い男と美しい女)				
(ロ)	ὁ	τῶν	Ἀθηναίων	πολλῆς	
	0-		5		-0
	主 語		付属語		主 語
	(アテナイの国民)				
(ハ)	ἡ	πολλή		σπουδή	
	0-	5		-0	
	主 語	付属語		主 語	
	(多くの努力)				

先ず、これらの例から、主語群を形成するのは、(イ)と(ハ)のように属性的な形容詞と、名詞の組み合わせだけでなく、(ロ)の場合のように名詞の属格形も含まれていることがわかる。この属格の用法は、一般には主語的属格 (Genetivus Subjectivus) と呼ばれる。その他、属格には素材を示す属格 (Genetivus Materiae) や、客語的属格 (Genetivus Objectivus) 部分を示す属格 (Genetivus Partitivus) 等があり、それぞれ付属語 (5) として記号づけされる。

ここで (+0, +0) のサインで示されている主語の等置とは、それぞれ記号がつけられている語が、対等に主語として文中で等しい役割を荷負う場合をさす。一方、分離 (0-, -0) は主語を形成する冠詞と名詞の間に他の語が入っている場合をさしている。(ロ) の場合も、(ハ) の場合も真中に主語の付属語 (5) が入っている。ここでは連続的な例をあげてあるが、他にも、色々な語が、いくつも入り込む可能性があることは序論で述べた通りである。上記では、主語の等置 (+0, +0) と分離 (0-, -0) の場合が示されているので、次に主語の付属語 (+5, +5) と分離 (5-, -5) が同時に一つの文章の内に表われている例をあげておこう。

τό γε μὴν μοι ἴσον τοῦ σοῦ τε καὶ ἐμοῦ λόγου ὀρέσκει 『Philebus』 14a

0— 3 -0 5— +5 +5 -5 1
主語 間目 主語 付属 付属 付属 付属 動詞

(あなたと私の言論の等しさが私を喜ばせます。)

この場合、主語を形成する冠詞 τό と名詞 ἴσον (等しさ) の間に三語が挿入されているので、これらは分離の関係である。又その主語につく付属語は冠詞 τοῦ と名詞 λόγου (言論) であるが、それらの間に、さらに付属語の σοῦ (あなたの) と ἐμοῦ (私の) が等値関係で挿入されている。

これらはすべて、主格で表わされた主語の例であるが例えば、間接話法において、不定詞が使われていて、しかも主文の主語と不定詞の主語が異なる場合は、不定詞の主語は対格であらわされると同時に、その不定詞に対する述語や目的語も対格であらわされることがある。

Σωκράτης ἡγεῖτο θεοὺς παντὰ εἰδέναι

(ソクラテスは神はすべてを知っていると考えている。)

ここで θεοὺς (神) も παντὰ (すべて) も形式的には対格形であるが、意味上からどちらが主語かは理解される。このような場合、θεοὺς は主語 (0) として記号化される。

次に動詞(1)とその付属語(6)の結合関係に移るが、その前に、述語(4)とその付属語(9)という項目もあることから、何故述語と動詞が区別されねばならないかを明確にしておこう。述語というのは、Predicate の訳で、常に主語 (Subject) 即ちギリシア語の ὑποκειμενον (基底) との関係で語られるものである。Subject は人がそれに関して話すところの題目であり、predicate は subject に関して言われるところのもの (κατηγορία) なのである。とすれば、名詞、形容詞、動詞のあらゆるものが述語となりえることは、先の主語の場合と同様である。では一体いかなる文型の時に、述語とみなされ、あるいは、動詞とみなされるかが示されねばならない。

ここで序論で語順の説明をした際に、形容詞には述語的形容詞という働きがあると説明したことを思い出して戴きたい。実はこれは形容詞だけでな

く、名詞にもあてはまり、その場合は、述語的名詞といわれる。それは例えば *ἐμὶ* (である) とか *γίγνομαι* (となる) という述語が、繫辞 (Copula) として使われる場合に生じる。

Διδάσκαλος ἐγενέτο. (彼は先生になった.)

これら Copula 的な動詞はギリシア語ではかなりあるが⁷⁾、その重要な働きは、時制や、叙法及び相などを示すことにあり、場 (locus) としての役目をもっている。意味的には無内容で、現在形は、しばしば、省略される。その為、形容詞が属性的な働きをしているのか、あるいは、述語的な働きをしているか、の区別は困難と言える。文法家達の間でも、形容詞を、動詞のグループに入れるのか、あるいは、名詞のグループに入れるかについては、長い間対立があった。アレクサンドリア学派の人々と、その後継者達は、形容詞を名詞の下位類とした。その理由は、それらが、特にギリシア語と、ラテン語において、名詞と共に、数と格の屈折変化をすることによる。他方プラトンや、アリストテレスは、動詞の下位類とみなした。プラトンは、初めて『クラテュロス』⁸⁾ という作品において、名詞と動詞の区別を、名前 (*ὄνομα*) と述べ言葉 (*ρῆμα*) という用語で行った。さらに、述べ言葉については『ソピステス』⁹⁾ において、動作をあらわす語がそれに相当すると定義している。亦形容詞の述語的な用法も動詞としてみなされており、その典型的な機能が述定 (predication) にあることを明らかにしている。しかし実際問題として、形容詞は述語的に働くこともあるし、又名詞の付属語として、働くこともあるのである。そしてそのいずれの使われ方においても、等置的用法 (Coordinate) と分離 (Split) の用法が見出されるのである。とすれば形容詞を名詞の部類に入るか、動詞の部類に入れるかを考えるよりは、両方の機能をうまく記号化することが重要となってくる。そこで形容詞あるいは名詞という品詞は記号化せず、その働きに応じて Copula 的な動詞と共に述語的に働く時は、述語として (4) と記号化し、その他、属性的な働きをする場合は、それぞれ主語につく場合は (5)、直接目的の場合は (7)、間接目的語の場合は (8) と記号化した。

更に以上のように繫辞的な働きをする場合以外のもので、述語的な働きをするものすべてを動詞として記号化した。

再び例を挙げて具体的に示そう。

動詞の等置関係 (+1, +1) の場合。括弧内は、単語でなく、句を構成していることを示す。

'Εμοὶ μὲν (πάντως νικᾶν) ἡδονὴ δοκεῖ καὶ δόξει. 『Philebus』 12a				
3	4	0	+1	+1
間目	述語	主語	動詞	動詞

(私はきっと快樂が勝利をおさめると思っている、そして将来もそう思うだろう。)

ここで動詞の *δοκεῖ* (そう思っている) *δόξει* (将来もそう思うだろう) は等置関係にある。

動詞の分離関係の場合。

'Αλλά δὴ πρὸς τρισὶ τέταρτόν ποτε ἔφαμεν (εἶναι γένος σκεπτόν)				
62	1	1—	2	—1
副詞	動詞	動詞	直目	動詞
『Philebus』 26E				

(第三のものにつけ加えて、第四の種類を考察しなければならないと、あの時我々は言った。)

これは序論で、語順の説明をした時に使用した例でもある。ここで、be 動詞の *εἶναι* と動詞的形容詞 *σκεπτόν* によって“探求すべきである”，という表現を構成しているのであるが、両語の間に *γένος* という直接目的語が入っている為に分離させられている。

動詞の付属語 (6) の等置関係 (+6, +6)。

——, καὶ κατὰ τοῦτον τὸν λόγον οὐτ' ἂν τῶν πρωτέων οὐδ' ἂν τῶν δευτερείων				
			+6	+6
			動詞の付属語	動詞の付属語

ἡδονὴ μετὸν ἀληθῶς ἂν ποτε λέγοιτο 『Philebus』 22E

1
動詞

(——そしてこの論法でいくなら、第一等賞だけでなく、又第二等賞までも、快楽には無縁であることが、真実性をもって語られることになるだろう。)

上記の動詞の付属語である *πρωτίων* (一等賞) と、*δευτερείων* (二等賞) は共に *πρωτεῖον*, *δευτερεία* の属格形である。本来属格は①名詞と共に用いられる場合と、②動詞と共に用いられる場合の二つに分けられる。前者については、既に主語の説明のところで、主語の付属語 (Attributum) として(5)の記号を使って、用法を明らかにした。ところで②の動詞と共に用いられる場合についてであるが、ギリシア語ではいくつかの動詞は、その意味を明確にする為に、属格を補語として用いることがある。¹⁰⁾ このような使用例にみられる属格が動詞の付属として(6)の記号が付けられている。

次に動詞の付属語の分離の例 (6—, -6)。

....., ἡττώμεθα μὲν ἀμφοτέρω τοῦ (ταῦτα ἔχοντος βεβάρως) βίου,.....

1	0	6—	—6
動詞	主語	動詞付	動詞付

『Philebus』 11e

(我々二人は、そのような確固たる生活をした人に敗れるだろう。)

属格形の冠詞と、それがかかる名詞 *βίου* (生活) の間に名詞の付属語として、三語からなる句が入り込んでいる。

述語の等置関係 (+4, +4) の例。

φαμέν που (ταῦτόν ἐν καὶ πολλὰ ὑπὸ λόγων γιγνόμενα περιτρέχειν).....

0	+4	+4	1	『Philebus』 15D
主語	述語	述語	動詞	

(同じものが、言論によって一になったり多になったりして、いたるところを走り回る、と我々はいふ。)

γινόμενα は be 動詞と並んで Copula 的な動詞として示された *γίγνομαι* (～になる) の分詞形である。その為、名詞の *ἐν* (一つ) と *πολλὰ* (多) は述語名詞となっている。この句全体は不定詞の *περιτρέχειν* (走り回る) につながって、本文の動詞 *φαμέν* (言う) の目的語となっている。

述語の分離 (4—, -4) の例。

....., οὐκ ἔστι που τοῦτ' ἔτι τὸ ὄντως ἡμῖν ἀγαθόν. 『Philebus』 21a

1	0	4-	62	3	-4
動詞	主語	述語	副詞	間目	述語

(それはもう、我々にとっては、本当の善ではない。)

述語を形成する冠詞 τὸ と 形容詞 ἀγαθόν (善) の間に二語入っている。
この場合、動詞 (ἔστι) は be 動詞で、Copula の働きをしている。又形容詞に冠詞がついていることから形容詞は名詞化されており、述語名詞として働いている。

述語の補語の等置関係 (+9, +9) の場合。

....., ἀλλ' ἔστι τὸ τοιοῦτον, ὥς ἐμοὶ φαίνεται, τῶν

0
主語

λόγων αὐτῶν ἀθανατόν τι καὶ ἀγήρων πάθος ἐν ἡμῖν. 『Philebus』 15d

+9	+9	4
述付属語	述付属語	述語

(むしろこのようなことは、我々の内にある言語の不老不死の宿業なのである。)

明らかにここで ἀθανατόν (不死) と ἀγήρων (不老) の二つの形容詞は、述語名詞である宿業 (πάθος) の付属語であり、両者は等置関係にある。

次に述語の付属語が分離 (9-, -9) している場合。

....., δόξαν τε ὀρθήν καὶ ἀληθείς λογισμούς, τῆς γε ἡδονῆς ἀμείνω καὶ

+0	5	5	+0	9	+4
主語	主付	主付	主語	述付属語	述語

λώω γίγνεσθαι σύμπασιν (ὅσαπερ αὐτῶν δυνατὰ μεταλαβεῖν) 『Philebus』 11c

+4	1	3	0	9-	4	-9
述語	動詞	間目	主語	述付属語	述語	述付属語

(正しい思いなしと、真なる計算は、これを分取する能力のある者すべてにとって、快樂よりすぐれたもの、効あるものとなる。)

全体は不定詞 γίγνεσθαι (となる) にかかっている。間接目的語 (3) の付属語 (8) を形成する句の内に述語の付属語の分離の例が出ている。述語の付属

(これらの内に、最も美しく、最も貴重なものの種族をつくりあげなかった。)

冠詞 *τὴν* と名詞 *φύσιν* (種族) は動詞 *μεμνηχανῆσθαι* (つくりあげる) の目的語を形成するが、その間に付属語である *καλλίστων καὶ τιμωτάτων* (最も美しく、最も貴重なもの) の等置が入り込んでいる。

直接目的語の等置と分離が同時に生じている場合の例を示そう。(+2, +2) (2-, -2)

Σκοπῶμεν δὴ καὶ κρίνωμεν τὸν τε ἡδονῆς καὶ τὸν φρονήσεως βίον ἰδόντες

+1	+1	+2-	+7	+2-	+7	-2	1
動詞	動詞	直目	直目付	直目	直目付	直目	動詞

χωρίς. 『Philebus』 20e

62

副詞

(では快樂の生活と、思慮の生活とを、各箇別にみて、観察し判定することにしましょう。)

二つの冠詞の *τὸν* は等置関係にあって、それぞれ、名詞 *βίον* (生活) にかかって目的語をつくっているが、同時に冠詞と詞の間に付属語が入っている為に分離関係にもある。その他、動詞の等置関係もみられる。

次に間接目的語の等置 (+3, +3) とその付属語の分離 (8-, -8) が同じ一つの文に表われている例ぎあげておこう。

....., ἢ τοῦτο μὲν ἑτέρῳ τῶν προειρημένων δοτέον ἡμῖν γενῶν,

0	3	8-	1	-8
主語	問目	問目付	動詞	問目付

ἡδονῇ δὲ καὶ λύπῃ,, τοτὲ μὲν ἀσπαστέον αὐτα, τοτὲ δὲ οὐκ

+3	+3	+62	1	2	+62
問目	問目	副詞	動詞	直目	副詞

ἀσπαστέον, 『Philebus』 32d

1

動詞

(あるいはそれは、我々が先に述べた類の内の、何か他のものに与えるべきなのであって、快苦に対しては時によっては歓迎すべきこともあれば、

時によっては歓迎すべきでないものとなる。)

間接目的語 *ἐτέρῳ* (他のものに対して) には冠詞 (*τῷ*) と名詞 (*γενῶν*) とからなる付属語がついているが、両者は *προειρηένων……ἡμῶν* (我々が先に述べた) という分詞句によってへだてられている。又快楽 (*ἡδονή*) と苦痛 (*λυπή*) はそれぞれ *ἡδονή*, *λυπή* の与格形で等置関係にある。

以上で、付属語 (Attributum) を持っている主語、動詞、述語、直接目的語、間接目的語についての用例の説明は終わる。格変化に関しては、主格は主語 (0) として、与格は間接目的語 (3) として、又対格は多少の例外をのぞいて、直接目的語 (2) として記号化された。属格の場合は、名詞につながる場合と、動詞につながる場合の二通りに大別され、名詞に附随する場合は、それぞれ名詞の役割に応じて、主語の付属語 (5)、直接目的語の付属語 (7) 間接目的語の付属語 (8) と記号され、動詞に附随する場合は、動詞の付属語 (6) として記号づけされることが明らかとなった。

最後に前置詞 (63) と副詞 (62) の説明をしておこう。これらは先の項目と異なり付属語がない。副詞も前置詞も共に屈折がなく、形態的にわかり易く、文章中、他の語との結合は、非常に自由である。副詞の場合は、*—ως* といった語尾をとるものが多いが、与格形をとることもある。例えば *παντῇ* (様々な仕方で) とか *τῷ ὄντι* (実際に) がそうである。又形容詞の最上級などの中性対格形で示されるものもある。例えば *κάλλιστα* (最も美しく), *τάχιστα* (最も早く), といったものがあげられる。その他 *πάλιν* (再び) *ἄμα* (同時に) *νῦν* (今や) と様々な形をもっている。

副詞と前置詞に関してはそれぞれの等置関係と分離の形式 (+62, +62) (62-, -62)¹¹⁾ (+63, +63) (63-, -63) を考えればよい。副詞の例は、先の例題の中に表われていたので除き、前置詞の例だけをあげておく。

前置詞の等置 (+63, +63) の例。

τί οὖν δὴ ταυτὸν ἐν ταῖς κακαῖς ὁμοίως καὶ ἐν ἀγαθαῖς ἐνὸν 『Philebus』 13b

0	+63	62	+63	1
主語	前置詞	副詞	前置詞	動詞

(一体同じ何が、悪しきものの内にも、又同様に善きものの内にも内在するのか)

二つの前置詞 ἐν (～の内に) は等置関係にある。

前置詞が分離 (63—, —63) している時。

....τότε ἐν ἑκάστοις εἶναι τοῖς ζώοις,... 『Philebus』 32e

62	63—	1	—63
副詞	前置詞	動詞	前置詞

(個々の動物の内にある時)

前置詞 ἐν (～の内に) は τοῖς ζώοις (動物) にかかるが、その間に二語が入っている。

以上で表に示された十二箇のすべての記号と、その用例についての説明を終える。名詞や形容詞といった項目が使われなかった理由も明らかにされたと思う。あくまで文章中の構成要素としての各語の振るまいが注目された。名詞は文章の中での役割に応じてそれにふさわしい記号付けがなされるように工夫してある。形容詞においてもこのことは言える。付属語としての役割を荷負ったり、述語として働いたりし、それぞれ別の記号づけがされている。一言、接続詞と不変化詞が排除されたことに触れておこう。その理由は主に、接続詞が、原則的には、文と文の結合に貢献し、文章中の等置関係や分離といったパターンをとらないということにある。又不変化詞に関しては、余りに量が膨大なこと、しかもその使い方も複雑で、記号化しにくいことから調査の対象からはずされた。しかし文章中には確かに表われてくるものであり、原本では不変化詞と接続詞は (68)、特に否定の接続詞は (61) という記号がついている。又、呼格も (69) と記号づけがされている。唯今回の語順の調査の為のプログラムでは読み飛ばすように工夫がなされている。

この表記法は、英国のマンチェスター大学の Brandwond 博士のプロジェクトで開発されたもので、現在まだ完成されてはいない。しかし、ギリシア語の統語解析に将来役立つものとして、その完成が注目されている。まだ

まだ改良の余地があると思われるが、現段階では、他に用例がないので、この表記法を使用した。出来上がったデータの例を“資料”として最後につけておく。ギリシア語の各語に、それぞれ番号が付されている。上記の記号以外の番号は、他の項目の研究用であり、今回は無視してある。データの作製は、上記の Brandwood 博士の他に、同じくマンチェスター大学の Neal 氏、リバプール大学の P. Hubby 氏が分担して行っており、筆者も携わっている。

このデータを処理するプログラムは、Neal 氏が作製した。Pascal で書かれているが、当大学の電算機の Pascal と異っている為、資料は英国より送ってもらうこととなった。以下はその集計結果である。(表 1~4 として最後に付記してあるので、参照されたい。)

(3)

先に、表の見方を説明しておく。最初の TYPE は、先に示された 12 ケの品詞分類をさす。順序は、主語(0)、動詞(1)、直接目的語(2)、間接目的語(4)、主語の付属語(5)動詞の付属語(6)副詞(62)前置詞(63)直接目的語の付属語(7)、間接語間接目的語の付属(8)語述語の付属語(9)となっている。Total は、各セクションに登場する記号の総数であり%は各品詞の総数に対する出現率を示す。以下等置(COORDINATE)も分離(SPLIT)も同様である。最後の等置分離(COORD+SPLIT)は例で示した通り、ある語が等置と分離の両方に関わりをもった場合の用例である。

始めに結果の数値を、各品詞の頻度そのものの比較という観点からみてみよう。先ず動詞(1)の出現率が、一番高いことが、目を引く。プラトンの作品の間では、一様に 30~32% をしめており、クセノフォンでは 38.0% を示し、主語の出現率の三倍以上の値となっている。これは、ギリシア語では、動詞の屈折によって、人称がわかる為、しばしば、主語が省略されることによるとと思われる。さらにクセノフォンと、プラトンの間では、述語(4)の出現率に関して違いがみられる。クセノフォンでは、四セクションを平均し

て、5.65% と低いのに対して、プラトンの三作品では、大体 7%~8% の出現率をしめる。

間接目的語 (3) の出現率が、『ピレボス』において極端に低くなっている。押し並べて『ラケス』、『テアイテトス』が、平均して 4% の出現率を示すのに対して、2.95% にしかになっていない。

逆に主語の付属語 (5) の出現率は、『ピレボス』が、一番高く、5.8% を示す。同時に、『メモラビリア』は 2.4%、『ラケス』3.0%、『テアイテトス』4.35% と、各作品の間でも差が出ている。

又『ピレボス』は、動詞の付属語 (6) の使用例が、他の三作品に比して、5.85% と非常に低い。因に『ラケス』では、10.2%、『テアイテトス』では、10.2%、『メモラビリア』でも、9.7% を記録している。

さらに直接目的語の付属語 (7) をみると、『ピレボス』が 5.2% であり、他の作品の平均値 3% に比べると、一つだけ高い値を示していることがわかる。

頻度の比較という観点からみると、『ピレボス』は、直接目的語 (2)、直接目的語の付属語 (7)、述語 (4) 主語の付属語 (5) において、総じて他の三作品より高い出現率を示す。他方、間接目的語 (3)、動詞の付属語 (6) の例では、出現率は低い。全体的にみて (1)『ラケス』と『テアイテトス』に数字の上から差がないこと、(2)『メモラビリア』が『ラケス』の数値に近いことから、『ピレボス』は、特異な作品であることが予想される。

次に等値 (COORDINATE) の観点から比較を試みてみよう。直接目的語 (2) に関しては、『ピレボス』の数値がとりわけ高いことに気付く。平均して、19.25% を示し、7%~11% 台に留まっている他の三作品を圧倒している。

又述語 (4) の等値関係も、『ピレボス』が他を抜きん出ており、27.8% を示す。『ラケス』が、13.2%、『メモラビリア』が 12.7% と近似値をとり、その中間に『テアイテトス』が、22.9% の値をとっている。

主語の付属語 (5) では、『ラケス』9.3%、『テアイテトス』10% 代の出現

率を誇るのに、『ピレボス』が 8.8% と弱冠低い。これは、先の出現率そのものの比較では、『ピレボス』が、四作品中最高の、5.85% をとっていることを考え合わせると、非常に興味深い値と言える。分離の値にどのような影響が出ているかに、大きな関心が寄せられる。

変わったところでは、副詞(62)と前置詞(63)の例が、『テアイテトス』が高く、続いて『ラケス』、『ピレボス』の順となっている点である。残念ながら、『メモラビリア』の値は、各セクションの分散がはげしく、結果としての信頼度に乏しい。これは又、すべての作品の、間接目的語の付属語(8)、述語の付属語(9)のデータにも言えることで、考察の対象からはずした。

又(7)の記号による直接目的語の付属語の、等値関係も、『ピレボス』が、15.3% と高く、『ラケス』10.1% 『テアイテトス』9.5% をおさえている。

次に分離(SPLIT)の結果に移ろう。先ず、主語(0)に関して言えば、矢張りここでも『ピレボス』が高く、各セクションを平均して、7.2% の数値に達しており、『ラケス』2.5% 『テアイテトス』の4.0% 『メモラビリア』の2.3% をはるかにしのぐ。ところで注目の主語の付属語(5)に目を転じてみよう。驚くことに、等値関係では、先に示したように『ラケス』9.3%、『テアイテトス』10.0% に比較して、『ピレボス』は 8.8% の低い値を示していたのにもかかわらず、分離に関しては、これが逆転して、『ピレボス』が 3.7% 『テアイテトス』3.4%、『ラケス』が 1.5% となっている。即ち、主語の付属語に関しては、等値と分離の関係が、逆転しているということになる。

さらに面白いことは、(63)の前置詞は、出現頻度に関しては、各作品で大差がないにもかかわらず、『ピレボス』では、等値として使用されている場合が、四セクションを平均して 12.9% であるのに、分離として使用されている場合は、16.1% と、分離の方が、等値よりも高いのである。(第三セクションだけは、逆転しているが、差は、1.2% と少ない。)他の作品では(『メモラビリア』はデータ数が少ないので、今回も比較の対象からはずす。)『ラケス』の第一セクション(等値が 6.7%、分離が 13.5%)を除いて、すべて

において、等値の出現率が分離の出現率をしのいでいる。

これらの比較から結論すると、『ピレボス』は、各品詞の出現頻度の面だけでなく、等値や分離の使用例や、その配置の組み合わせの面からも、他の作品と大いに異なっていることがわかる。とりわけ、分離が多いということは、関連しあう語同志が離れているということであり、解釈を非常に困難にさせる原因となっている。分離の頻度が高ければ、高い程、文章は複雑になる。一般に『ピレボス』は、研究家の間では、『テイマイウス』、『ポリ テイコス』、『ソピステス』と並んで、プラトンの最後の作品である『法律』と同グループをなすと言われており、非常に難解な作品として有名である。これらの作品には、抑揚の均衡、イオニック与格複数の使用例の多いことが、キャンベル¹²⁾によって調査されている。又プラスは¹³⁾、ヒアトス¹⁴⁾（二重母音連続）が、後期に少ないことを発見した。プラトンが、晩年の円熟期に、文体技巧の面で、様々な工夫を凝らしたことは、多くの研究者によって証言されている。はからずも、今回の語順の調査でも、その難解さを裏付けるような結果を得ることが出来た。クセノフォンに関してはデータの不備を考慮しても、総じて、等置や分離の数値がプラトンに比して低いことから、技巧の少ない、平明な文体であると言える。

今後、上記の三作品に留まらず、プラトンの他の作品においても、このような語順の調査を行うならば、初期、中期、後期の文体の推移が明らかにされられると思われる。とりわけ前置詞の等置と分離、及び、主語と直接目的語の付属語や述語の等置を調査することは、年代的に差が出ているので非常に有効と思われる。

注

- 1) 古典文法では三部分に分けられるが、19 世紀以後の現代文法では、形態論 (Morphology) と統語論 (Syntax) の二つに分けられる。
- 2) 文体研究は、J. L. Thorne によると、大体以下の三つに分けられる。(i) 個人の表現上の特性を扱うもの。(ii) 時代、階層、流派などの表現の特性を扱うもの。(iii) 各言語の比較などを行うもの。例えば、国語様式論、国語特性論。
- 3) 田中・松平、「ギリシア語文法」、P. 108.

- 4) Lyons. J, "New Horizons in Linguistics." p. 118.
- 5) 付属語は (Attributum) の訳で, その他, 附随語, 属詞, 補語, などと訳される場合もある. 独立では能機せず, ある語を修飾したり, 意味を補ったりする為に使用される語をさす.
- 6) 名詞と形宿詞は, 形態上区別がない. 例えば, ἄμεινον (よりすぐれた) という形容詞に冠詞 τὸν をつけると, τὸν ἄμεινον (よりすぐれた者) という名詞になる.
- 7) 田中・松平, 前掲書, p. 106 に沢山の Copula の的な動詞の例がある.
- 8) プラトン, 『クラチエロス』 425A.
- 9) プラトン, 『ソフィスト』 262A.
- 10) 田中, 松平, 前掲書, p. 117 に例がある.
- 11) 副詞は一語で形成されるので, 分離の場合は無いと考えて良い.
- 12) Campbell; "The Sophistes and Politicus of Plato" (1867 年), 序論.
- 13) Blass, "Attische Beredsamkeit. Bd. II." S, p. 462 (1874).
- 14) この方法は, 修辞家イソクラテスの散文に顕著で, 同一語内では約音 (Contraction) 二語間では融音 (crasis) や省音 (elision) や除音 (aphaeresis) によって, 母音の連続をさける工夫がなされている.

表 1 プラトン『ラケス』

TOTALS OF ORDINARY SYNTAGMS
(EXCLUDING CLAUSES/PHRASES):

① 178—184C8

TYPE	TOTAL	%	COORDINATE	%	SPLIT	%	COORD+SPLIT	%
0	147	11.7	14	9.5	1	0.7	2	1.4
1	410	32.5	12	2.9	0	0.0	0	0.0
2	139	11.0	9	6.5	2	0.7	1	0.7
3	47	3.7	2	4.3	1	1.4	0	0.0
4	74	5.9	11	14.9	0	0.0	1	1.4
5	56	4.4	4	7.1	2	3.6	0	0.0
6	93	7.4	5	5.4	0	0.0	0	0.0
62	101	8.0	2	2.0	0	0.0	0	0.0
63	104	8.2	7	6.7	14	13.5	1	1.0
7	59	4.7	9	15.3	1	1.7	0	0.0
8	9	0.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0
9	22	1.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0
TOTALS	1261	100.0	75	5.9	21	1.7	5	0.4

② 184C—190A8

TYPE	TOTAL	%	COORDINATE	%	SPLIT	%	COORD+SPLIT	%
0	114	9.0	8	7.0	1	0.9	0	0.0
1	422	33.4	28	6.6	0	0.0	0	0.0
2	108	8.6	9	8.3	4	3.7	1	0.9
3	70	5.5	4	5.7	0	0.0	0	0.0
4	88	7.0	19	21.6	0	0.0	0	0.0
5	43	3.4	6	14.0	1	2.3	0	0.0
6	141	11.2	13	9.2	1	0.7	0	0.0
62	108	8.6	10	9.3	0	0.0	0	0.0
63	92	7.3	9	9.8	5	5.4	4	4.3
7	41	3.2	2	4.9	1	2.4	0	0.0
8	4	0.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0
9	32	2.5	2	6.2	2	6.2	0	0.0
TOTALS	1263	100.0	110	8.7	15	1.2	5	0.4

③ 190A—196A3

TYPE	TOTAL	%	COORDINATE	%	SPLIT	%	COORD+SPLIT	%
0	158	12.8	5	3.2	7	4.4	1	0.6
1	385	31.3	22	5.7	0	0.0	0	0.0
2	97	7.9	7	7.2	4	4.1	2	2.1
3	44	3.6	2	4.5	0	0.0	0	0.0
4	105	8.5	10	9.5	2	1.9	0	0.0
5	53	4.3	4	7.5	0	0.0	0	0.0
6	142	11.5	5	3.5	0	0.0	0	0.0
62	92	7.5	2	2.2	0	0.0	0	0.0
63	74	6.0	20	27.0	12	16.2	2	2.7
7	24	2.0	3	12.5	2	8.3	1	4.2
8	10	0.8	2	20.0	1	10.0	0	0.0
9	46	3.7	6	13.0	5	10.9	0	0.0
TOTALS	1230	100.0	88	7.2	33	2.7	6	0.5

— 133 —

④ 196A—20/C2

TYPE	TOTAL	%	COORDINATE	%	SPLIT	%	COORD+SPLIT	%
0	157	13.2	24	15.3	6	3.8	0	0.0
1	385	32.3	5	1.3	0	0.0	0	0.0
2	117	9.8	13	11.1	2	1.1	0	0.0
3	50	4.2	10	20.0	0	0.0	0	0.0
4	73	6.1	5	6.8	0	0.0	0	0.0
5	47	3.9	4	8.5	0	0.0	1	2.1
6	126	10.6	6	4.8	2	1.6	0	0.0
62	105	8.8	5	4.8	0	0.0	0	0.0
63	48	4.0	10	20.8	4	8.3	0	0.0
7	40	3.4	3	7.5	0	0.0	0	0.0
8	15	1.3	4	26.7	0	0.0	0	0.0
9	28	2.4	13	46.4	0	0.0	0	0.0
TOTALS	1191	100.0	102	8.6	14	1.2	1	0.1

表 2 プラトン『テアイテトス』

① 142A—145C7

TYPE	TOTAL	%	COORDINATE	%	SPLIT	%	COORD+SPLIT	%
0	58	8.9	2	3.4	5	8.6	0	0.0
1	222	34.0	10	4.5	0	0.0	0	0.0
2	54	8.3	4	7.4	0	0.0	0	0.0
3	32	4.9	3	9.4	0	0.0	1	3.1
4	43	6.6	6	14.0	1	2.3	0	0.0
5	26	4.0	2	7.7	1	3.8	0	0.0
6	56	8.6	2	3.6	0	0.0	0	0.0
62	79	12.1	4	5.1	0	0.0	0	0.0
63	33	5.1	9	27.3	2	6.1	0	0.0
7	16	2.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0
8	9	1.4	0	0.0	0	0.0	0	0.0
9	24	3.7	6	25.0	1	4.2	0	0.0
TOTALS	652	100.0	48	7.4	10	1.5	1	0.2

② 145C—148E6

TYPE	TOTAL	%	COORDINATE	%	SPLIT	%	COORD+SPLIT	%
0	79	11.7	7	8.9	0	0.0	1	1.3
1	202	29.9	0	0.0	0	0.0	0	0.0
2	67	9.9	4	6.0	4	6.0	0	0.0
3	23	3.4	3	13.0	1	4.3	1	4.3
4	54	8.0	8	14.3	0	0.0	0	0.0
5	22	3.3	4	18.2	1	4.5	0	0.0
6	71	10.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0
62	47	7.0	6	12.8	0	0.0	0	0.0
63	31	4.6	10	32.3	2	6.5	0	0.0
7	43	6.4	9	20.9	2	4.7	0	0.0
8	11	1.6	0	0.0	0	0.0	0	0.0
9	26	3.8	2	7.7	2	7.7	0	0.0
TOTAL	676	100.0	53	7.8	12	1.8	2	0.3

③ 148E—154D7

TYPE	TOTAL	%	COORDINATE	%	SPLIT	%	COORD+SPLIT	%
0	165	13.2	34	20.6	6	3.6	0	0.0
1	584	30.7	14	3.6	0	0.0	0	0.0
2	111	8.9	22	19.8	5	4.5	0	0.0
3	61	4.9	8	13.1	6	9.8	0	0.0
4	114	9.1	25	21.9	0	0.0	0	0.0
5	60	4.8	5	8.3	2	3.3	0	0.0
6	128	10.2	6	4.7	1	0.8	0	0.0
62	80	6.4	5	6.2	0	0.0	1	1.8
63	57	4.6	17	29.8	6	10.5	0	0.0
7	24	1.9	1	4.2	0	0.0	0	0.0
8	16	1.3	2	12.5	0	0.0	0	0.0
9	50	4.0	13	26.0	2	4.0	1	2.0
TOTALS	1250	100.0	152	12.2	28	2.2	2	0.2

④ 154D—158E11

TYPE	TOTAL	%	COORDINATE	%	SPLIT	%	COORD+SPLIT	%
0	131	13.4	25	19.1	5	3.8	1	0.8
1	305	31.1	16	5.2	0	0.0	0	0.0
2	78	8.0	9	11.5	3	3.8	0	0.0
3	29	3.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
4	80	8.2	33	41.2	0	0.0	0	0.0
5	52	5.3	3	5.8	1	1.9	0	0.0
6	113	11.5	2	1.8	2	1.8	0	0.0
62	78	8.0	4	5.1	0	0.0	0	0.0
63	51	5.2	13	25.5	4	7.8	1	2.0
7	34	3.5	4	11.8	0	0.0	0	0.0
8	2	0.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0
9	27	2.3	0	0.0	1	3.7	0	0.0
TOTALS	980	100.0	109	11.1	16	1.6	2	0.2

表 3 プラトン『ピレポス』

① 11A1-17A5

TYPE	TOTAL	%	COORDINATE	%	SPLIT	%	COORD+SPLIT	%
0	144	12.3	17	11.8	12	8.3	2	1.4
1	361	30.8	16	4.4	0	0.0	0	0.0
2	113	9.6	13	11.5	4	3.5	1	0.9
3	25	2.1	0	0.0	1	4.0	0	0.0
4	118	10.1	30	25.4	1	0.8	1	0.8
5	85	7.3	11	12.9	2	2.4	1	1.2
6	49	4.2	3	6.1	1	2.0	0	0.0
62	97	8.3	6	6.2	1	1.0	0	0.0
63	59	5.0	6	10.2	7	11.9	0	0.0
7	61	5.2	10	16.4	0	0.0	1	1.6
8	7	0.6	2	28.6	0	0.0	0	0.0
9	52	4.4	4	7.7	0	0.0	1	1.9
TOTALS	1171	100.0	118	10.1	29	2.5	7	0.6

② 17A-22B9

TYPE	TOTAL	%	COORDINATE	%	SPLIT	%	COORD+SPLIT	%
0	110	10.6	17	15.5	6	5.5	2	1.8
1	306	29.5	13	4.2	0	0.0	0	0.0
2	112	10.8	24	21.4	1	0.9	1	0.9
3	35	3.4	4	11.4	0	0.0	0	0.0
4	87	8.4	27	31.0	1	1.1	0	0.0
5	62	6.0	4	6.5	2	3.2	0	0.0
6	69	6.7	4	5.8	2	2.9	0	0.0
62	90	8.7	4	4.4	0	0.0	0	0.0
63	80	7.7	11	13.7	10	12.5	3	3.7
7	55	5.3	11	20.0	0	0.0	0	0.0
8	7	0.7	2	28.6	0	0.0	0	0.0
9	24	2.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0
TOTALS	1037	100.0	121	11.7	22	2.1	6	0.6

③ 22B--27B9

TYPE	TOTAL	%	COORDINATE	%	SPLIT	%	COORD+SPLIT	%
0	84	8.7	16	19.0	4	4.8	1	1.2
1	307	31.9	14	4.6	1	0.3	0	0.0
2	145	15.1	40	27.6	7	4.8	1	0.0
3	32	3.3	0	0.0	1	3.1	0	0.0
4	71	7.4	21	29.6	0	0.0	0	0.0
5	39	4.1	4	10.3	2	5.1	0	0.0
6	58	6.0	8	13.8	2	3.4	0	0.0
62	80	8.3	1	1.2	0	0.0	0	0.0
63	64	6.7	13	20.3	14	21.9	0	0.0
7	64	6.2	5	8.3	4	6.7	0	0.0
8	4	0.4	0	0.0	0	0.0	0	0.0
9	18	1.9	0	0.0	2	11.1	0	0.0
TOTALS	962	100.0	122	12.7	37	3.8	2	0.2

④ 27B--33E13

TYPE	TOTAL	%	COORDINATE	%	SPLIT	%	COORD+SPLIT	%
0	127	10.2	28	22.0	13	10.2	3	2.4
1	374	30.1	22	5.9	0	0.0	0	0.0
2	115	9.3	19	16.5	7	6.1	0	0.0
3	37	3.0	5	13.5	1	2.7	0	0.0
4	115	9.3	29	25.2	0	0.0	3	2.6
5	73	5.9	4	5.5	3	4.1	0	0.0
6	81	6.5	4	4.9	4	4.9	0	0.0
62	107	8.6	3	2.8	1	0.9	0	0.0
63	95	7.6	7	7.4	17	17.9	1	1.1
7	51	4.1	8	15.7	1	2.0	0	0.0
8	6	0.5	0	0.0	1	16.7	0	0.0
9	62	5.0	21	33.9	1	1.6	0	0.0
TOTALS	1245	100.0	150	12.1	49	3.9	7	0.6

① 2.1 1.1—2.2 1.4

TOTALS

TYPE

TOTALS

③ 2.2.12-2.7.1.3

TYPE	TOTAL	%	COORDINATE	%	SPLIT	%	COORD+SPLIT	%
0	314	12.3	16	5.9	6	1.9	0	0.0
1	954	37.3	17	1.8	1	0.1	0	0.0
2	257	10.1	19	7.4	8	3.1	0	0.0
3	94	3.7	2	2.1	1	1.1	0	0.0
4	179	7.0	33	18.4	1	0.6	0	0.0
5	73	2.9	7	9.6	0	0.0	2	2.7
6	259	10.1	14	5.4	3	1.2	0	0.0
62	155	6.1	8	5.2	0	0.0	0	0.0
63	124	4.8	5	4.0	14	11.3	2	1.6
7	57	2.2	2	3.5	3	5.3	0	0.0
8	8	0.3	3	37.5	0	0.0	0	0.0
9	83	3.2	5	6.0	3	3.6	0	0.0
TOTALS	2557	100.0	131	5.1	40	1.6	4	0.2

④ 2.7.1-2.10.6.4

TYPE	TOTAL	%	COORDINATE	%	SPLIT	%	COORD+SPLIT	%
0	143	11.9	15	10.5	7	4.9	0	0.0
1	456	38.1	18	3.9	0	0.0	0	0.0
2	135	11.3	19	14.1	5	3.7	0	0.0
3	44	3.7	4	9.1	0	0.0	0	0.0
4	70	5.8	8	11.4	1	1.4	0	0.0
5	33	2.8	2	6.1	1	3.0	0	0.0
6	103	8.6	0	0.0	1	1.0	0	0.0
62	81	6.8	13	16.0	0	0.0	0	0.0
63	67	5.6	2	3.0	5	7.5	0	0.0
7	40	3.3	8	20.0	2	5.0	0	0.0
8	2	0.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0
9	24	2.0	0	0.0	1	4.2	0	0.0
TOTALS	1198	100.0	89	7.4	23	1.9	0	0.0

103 1=ὄρα δη, 5=πρωταρχε, 2(10 12-(30 7=τύνα 2=λογον) 1=μελλεις -2(63=παρα φιληθου
1=δεχεσθαι) 62=νυνυ και 12(30 63=προς τύνα *63=τον παρ' ήμιν 1=ἀμφοισθητειν)),

=x 11β=

6(27 ἐάν μη 3=σου4 63=κατα νουν 1=ή λεγομενος). 102 1=βουλει 2(103 1=συγκεφαλαιωσωμεθα
2=ἐκατερον);

+サインのかわりに, 1が使われている。

() 及び他の数字は, クロースや構文研究の為のものである。